

日本の改革派・長老派教会の礎を築いたJ.C.ヘボン

辻 幸宏

はじめに

J.C.ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815. 3. 13 - 1911. 9. 21) は、1859年に来日した最初の宣教師の一人であり、医療分野・辞書 (ローマ字) 作成・教育 (明治学院大学設立)、聖書翻訳等、日本における多大な功績が知られている。

しかしヘボンが、日本最初の長老教会 (横浜第一長老教会 (現: 日本基督教団横浜指路教会)、1874) を設立したこと、ウェストミンスター信仰告白・同小教理問答を翻訳したことなど、現在の日本に立てられている改革派・長老派教会にとって重要なことが紹介されることはほとんどない。

袴田康裕は、「改革派神学第44号(2018)」における「ウェストミンスター信仰告白の解釈について」の「2. 日本語・英語現代語について」において、「次に日本語訳と英語現代訳を検討しておく。まず、日本語訳としては出版年代順に以下のものを挙げるができる。

①堀内友四郎訳、基督教文庫(25)、長崎書店、1940年。」以下8つの翻訳を挙げた上で、「石丸新『改革派カテキズム日本語訳研究』、新教出版社、1996年。を挙げるができる」(p149-150)。と記し、ヘボン訳についての言及がいっさい行われていない。

また、「〈ウェストミンスター信仰告白〉歴史的・分析的註解」(松谷好明、一麦出版社、2023) においても、「序説 2. 歴史の中のウェストミンスター信仰告白」で、下記のように記し、ここでもヘボン訳についての言及が行われていない。

「(3)一方我が国のウェストミンスター信仰告白は、プロテスタントの宣教が活発に展開され始めた19世紀後半の「明治期」から、日本基督一致教会、その後継たる日本基督教会内外においてその存在はある程度知られていたが、それに対する評価は全体として必ずしも高くはなく、むしろ煩瑣 (はんさ) な、「死せる正統主義」の異物、「ダビデに与えられたサウル王の鎧」(植村正久)、無用の長物、と見なされて、真剣な信仰的・学問的取り組みの対象とはならなかった。そのため、その翻訳すらも「太平洋戦争」前夜の1940 (昭和15) 年の堀内友四郎訳が長崎書店から出されたのを嚆矢 (こうし) とする」(p23)。

しかし、安田直人^{*1}、池田多実男^{*2}、山口陽一^{*3}等の研究により、日本基督一致教会時代にウェストミンスター信仰告白・同小教理問答の翻訳がヘボンにより行われていることが明らかになっており、『覆刻・日本基督一致教会信仰ノ箇条』(2013、教文館) が出版されている。

そのため、今回の講演では、ヘボンの業績の全体像を俯瞰 (ふかん) しつつ、ヘボンによってウェストミンスター信仰告白・同小教理問答が日本基督一致教会の公的信条として翻訳されたことを確認し、ヘボンの行った業績が、日本キリスト改革派教会に受け継がれてきている礎であることを確認していくこととする。

1. ヘボンの日本宣教 (参照: 別紙年表)

序. ヘボンとは…

*1 「日本基督一致教会の信仰告白について—その翻訳出版、実際の使用について」(安田直人、「改革派神学」第26号 神戸改革派神学校、1999)

「教理用語の日本語訳の問題—明治初期の諸翻訳から辿る」(安田直人、東部中会教師会発題、2013. 1. 28)

*2 「日本プロテスタント宣教初期における「ウェストミンスター小教理問答」邦訳の意義—邦訳『耶蘇教畧問答』刊行と神学思想背景を中心に—」(池田多実男、「神学」第68号、東京神学大学、2006)

*3 「法典長老教会長老 安川一 キリスト教蔵書展『ウェストミンスター小教理』最初の日本語訳など」、東京基督教大学図書館・国際宣教センター共同企画、2010)

ヘボンに関しては、「ヘボン式ローマ字」が有名である。小学校において「ヘボン式」でローマ字を学び、現在においても、パスポート等公式な文書には、ヘボン式ローマ字で記すことが求められている。

またヘボンに関しては、多くの伝記が出版されており^{*4}、さらに、ヘボンがアメリカ長老教会の本部にミッション・レポートを送り続けたものと、弟スレータ・ヘップバーン牧師に宛てた手紙の翻訳が、「ヘボン在日書簡全集」^{*5}として出版されている。

ヘボンは、幅広い分野において活躍したが、全体像を理解するために、それぞれの分野毎に分類分けして、全体像を把握することとした（別紙年表）。私は、「生涯（全般）」、「医療」、「教育」、「辞書・ローマ字」、「教会」、「聖書翻訳」、「信仰告白・書籍」と7つに分類分けした。今講演では、これらを分野別に紹介しつつ、現在の改革派・長老派教会との関係、影響を与えたものを中心に考えて行くこととする。

日本では「ヘボン」と呼ばれ、漢字では「平文」と記されているが、本名はジェームス・カーティス・ヘップバーン（James Curtis Hepburn）であり、スコッチ＝アイリッシュである。「ヘップバーン」が当時の日本人は発音出来ず、通称で「ヘボン」と呼ばれた。なおヘボンの生涯は、1815年3月13日～1911年9月21日である（96歳）。

1-1. ヘボンの医療

ヘボンは多くの顔を持っているが、本職はペンシルバニア州出身の医者である（脳外科医）。1846年にはニューヨークで開業し、膨大な財産を築いた。その前にも1843～45年に、マカオに医療宣教師として赴いており、その後もアジア伝道への思いを持ちつつ、医療活動を行っていた。

そして1859年に日本が開国することとなり、米国長老教会（北長老）の医療伝道宣教師として日本に妻のクララと共にニューヨークを発ち、神奈川に入国した。禁教令下の日本において、最初から宣教を行うことは出来ず、当初は、成仏寺（じょうぶつじ）に住居を構えつつ、宗興寺（そうこうじ）において眼科を中心に医療活動を行う。当時、眼病が流布しており、多くの人たちが苦しんでいたことによる。

また、3年目の1862年に生麦事件に遭遇する。^{*6}この事件において重傷の傷を負ったイギリス人の手術を行ったのがヘボンである。

また当時の有名な歌舞伎役者三代目沢村田之助の左足切断手術を行ったことでも有名である。

教会と医療の関係は、直接的ではない。しかし、福音に伴うディアコニアに基づき、医療・福祉が展開されていくのであり、ヘボンにとっても真の意味での医療・福祉が行われるためには、信仰抜きではありえない。

1-2. ヘボンの教育

次にヘボンの携わった教育事業について確認する。ヘボンと妻クララは、1860年頃には、居住地である成仏寺において私塾を始める。1863年に横浜居留地の宣教師館に移ったヘボ

*4 「信仰に生きたひとたち2 ヘボン」（栗栖ひろみ著、ニューレライフ出版社、1982）

「ヘボンの生涯と日本語」（望月洋子著、新潮選書、1987）

「ヘボン 同時代人の見た」（W.E. グリフォス著、佐々木晃訳、教文館、1991）

「ヘボン物語 明治文化の中のヘボン像」（村上文昭著、教文館、2003）

「ヘボン博士の愛した日本」（杉田幸子著、いのちのことば社・フォレストブックス、2006）

「ヘボンさんと日本の開化」（大西晴樹、NHK出版、2014）

「ヘボン塾につらなる人々-高橋是清から藤原義江まで」（原豊著、明治学院サービス、2003）等

*5 「ヘボン在日書簡全集」（岡部一興編、教文館、2009）

*6 事件は、文久2年8月21日（1862年9月14日）に、武蔵国橘樹郡生麦村付近において、薩摩藩主島津茂久（忠義）の父・島津久光の行列に乱入した騎馬のイギリス人たちを、供回りの藩士たちが殺傷（1名死亡、2名重傷）した。尊王攘夷運動の高まりの中、この事件の処理は大きな政治問題となり、そのもつれから薩英戦争（文久3年7月）が起こった。

ン夫妻は、改めて私塾を始める。これがヘボン塾と名付けられ、クララが英語、そしてヘボンが医学を教えたと言われているが、聖書・神学も教えていたと考えられている。

こうした流れを受け、ヘボン塾で教えていたアメリカ・オランダ改革派教会宣教師のメアリー・ギターが、ファリス・セミナリーを設立し、それが現在のフェリス女学院となる。

またヘボンは、東京一致神学校(1877-87)、東京一致英和学校(1883-87)に協力し、それが発展する形で明治学院(1887-)を創設するに至る。明治学院に関しては、伝記を始め、明治学院を中心に多くの研究が行われている。

宗教改革の時代から、教会の働きとして教育が行われてきたが、聖書を読み理解するための初等教育、そして神学を研究するための大学教育は、キリスト者の立場、信仰理解に基づいて行われることが求められ、教会の一つの働きとして位置づけなければならない。

開国当初、多くの宣教師がミッションスクールを建てたことは、こうした理解の中で行われたが、明治政府は、教会と学校を分離することに力を注ぎ、教会と教育、医療・福祉が分断される状況に追い込まれていく。

1-結. ヘボンに見る宣教モデルと現状

ヘボンは、医療宣教師として来日したが、後述する教会を建てることと併せて、教育・医療に力を注いだということは、①教会（長老主義・改革派信仰）、②教育（初等教育・高等教育+神学）、③医療・福祉を三位一体的にとらえ宣教する教会の本来のあり方を提示していると言って過言ではない。

大韓イエス教長老会（高神）は、日本植民地から解放され、新たな教会形成をするにあたり、神学校と病院を建てることも並行して行った。そして現在においても、高神神学院、高神大学、付属福音病院があり、病院に関しては、釜山で一番大きい病院であり、国民からも認知されている。

日本キリスト改革派教会では、双恵学園（幼稚園・小学校・中学校^(兼)）が1953年に開校したが、幼稚園以外は廃校に迫られ、この幼稚園も現在は教会が直接関与していない。また、四日市教会はまきば幼稚園を運営している。淀川キリスト教病院（PCUSA）や清和学園女子中高等学校、金城学院（中学・高校・大学）、四国学院は、外国ミッション等によって始められ、現在でも緩やかな連携が持たれているが、いずれにしても、三位一体的宣教には程遠いと言わなければならない。

ただ一つ評価出来る活動は、忠海教会が、聖愛幼稚園と社会福祉法人聖恵会を運営しており、地域に密着して活動を行っている。ただ聖愛幼稚園は、2019年に休園に追い込まれ、地方伝道の現状を垣間見ることができる。

また、静岡教会における静岡盲人キリスト教センターは継続的な働きが行われており、また311以後の救援活動として開始されたのぞみセンター、サクラハウス、陸前高田支援、Café de FUKUSHIMAは、教会の働きとして継続している。

いずれにしても、日本の教会における課題は、教会における宣教活動と、学校教育、医療・福祉活動とが分断されていると言える。

2-1. ヘボンによる和英・英和辞書作成

最初にも語ったようにヘボン式ローマ字が有名であるが、ローマ字は副産物であり、ローマ字を生み出した和英・英和辞書の編纂を確認しなければならない^{*7}。そして辞書の編纂もまた、聖書翻訳を行うための準備であったことを、後に私たちは確認することとなる。

前述のとおりヘボンは来日の前、アモイにて医療宣教を行っていた。1841年7月～1845年11月とわずか4年余の期間であるが、実はこの時、アモイ語の辞書を編纂していたことが記録に残されている。4年で完成しているので、重厚なものではなかったかと思うが、ここからヘボンの語学的能力を垣間見ることができる。

*7 参照「ヘボンの生涯と日本語」（望月洋子著、新潮選書、1987）

そして1859年に来日して、ヘボンの辞書作成が始まる。医療活動の傍ら、人々から単語の意味を聞き、確認し、単語帳を作る作業を繰り返していた。そして1867年に初版「和英語林集成」を出版する。このときヘボンは、辞書の印刷のために上海に渡っている。つまり当時の日本には、まだ活版印刷が持ち込まれておらず、活字がなかった。そのため、上海に出来ていたアメリカ長老教会の印刷所^{*8}において、日本語のフォント(明朝体)の活字を作ることから始め、印刷して、日本に持ち帰った。第二版の時も同様である。

また、当初の書名は「和英詞林集成」として出版を願っていたが、「和英語林集成^{*9}」^{*10}と改名して出版した。出版のために相当な費用がかかったことから、当初4厘で売り出そうとしていたものを、5厘で売ることにしたことから、書名も語呂合わせで「語林集成」と改めたという経緯がある。

1872年に第二版が出版され、第三版は1886年^{*11}に出版された。この時に、ローマ字表を添付したことから、現在においても、この表に従ってローマ字が用いられている。

また、初版から言えることあるが、本格的な和英・英和辞典としては、初めて出版されたものであり、非常に多くが売り上げられた。そのため「和英語林集成」は、模造品も回ることとなり、日本で初めて著作権が与えられた書籍となり、この著作権は後に丸善へと売却されることとなる(2,000ドル、10,000円)。ヘボンは、この売上を明治学院に寄贈し、ヘボン館が建てられた。

2-2. 聖書翻訳^{*12}

ヘボンが辞書を編纂した目的は、聖書翻訳のためであった。ヘボンは、1841年、シンガポールにおいて、ギュツラフ訳日本語聖書『約翰福音之傳』(1837)を入手しており、来日するにあたり、船の中で、日本語の勉強を行っていた。

ヘボンの翻訳活動は、辞書作成が一段落した(第二版1872年)頃から始まった。1872年から共同訳として聖書翻訳に入ることができたのは、キリシタン禁令(1873)が解除する見通しがたったことも、理由と考えられる。ちなみに、開国以後では、ゴーフルが最初に「摩太(マタイ)福音書」(1871)を出版し、相前後してヘボンはブラウンと共に、「新約聖書馬可傳」(マルコ)、「同約翰傳」(ヨハネ)、「同馬太傳」(マタイ)を出版している(1872-73)。

聖書を翻訳するにあたり、当初は試行錯誤の時代が続く。英訳聖書は、1611年に翻訳された欽定訳聖書“King James Version”が、荘厳で格調高い文体として、長年用いられていた。また中国語においては、ニリソンによって翻訳された「神天聖書」(1823)において標準化された。特徴としては、忠実・明敏・簡潔を原則として、中国の哲学・宗教用語を避けている。そして、中国語で翻訳された神学用語が日本語にも影響を与え、神学用語や固有名詞を引き継ぐこととなる。

またハングルは、「聖經全書 改訳」(1938)があり、漢字抜きハングルの文字を用いた。当時の朝鮮半島においては漢字が用いられており、ハングルが公的に用いられることはなかった。しかし聖書が流布することにより、一般民衆にもハングルが広まっていくこととなる。

*8 アメリカ長老教会は印刷所「花華聖契書房」を1844年にマカオに開設し、翌年に寧波に移転して「花華聖契書房」となり、1860年に上海に再度移転し「美華書館」(The American Presbyterian Mission Press)と改名する。美華書館は、日中の活版印刷の発展に大きく寄与することとなる。参照：「本と活字の歴史事典」(印刷史研究会編、柏書房、2000、p236)

*9 「美國平文先生編譯 『和英語林集成』」(復刻版、明治学院、2013)

*10 「デジタル和英語林集成」(明治学院大学図書館 デジタルアーカイブス)
<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/>

*11 「和英語林集成」(J. C. ヘボン、講談社文庫、1980)

*12 参照：「聖書の日本語」(鈴木範久著、岩波書店、2006)

そうした中、日本語聖書の翻訳においても、「1872年9月20日、日本在住の各ミッション合同の第1回宣教師会議が、横浜居留地39番のヘボン宅で開かれた。席上、ヘボンは各教派共同で聖書の翻訳に当たることを提案した。各教派からS.R. ブラウン、ヘボン、グリーン、マクレ、N. ブラウン、パイパーとライトの7名が選ばれ、1874年「翻訳委員社中」が組織され新約聖書の翻訳に従事した」。そして新約聖書の分担表は下記のとおりである。

ヘボン：4福音書、ローマ、コリント前後、テサロニケ前後、ヘブル、ヤコブ、ペテロ前後、ユダ

ブラウン：使徒、ヨハネ黙示録

ヘボン、ブラウン：エペソ、ピリピ、テモテ前後、テトス、ピレモン

グリーン：ガラテヤ、コロサイ、ヨハネ書

個人訳の試行錯誤の時代のことを、S.R. ブラウンは下記のとおり分析している。

①漢字かな混じり文が、日本語の本来的発達を妨げている。

②口語文が日本の知識人に軽蔑を受けている。

口語の模範的文体が確立されていない。

③日本語全体が、現在、流動的（漢文調・口語調の流れが交錯している）。

また、日本では、中国語を読める人が多く、聖書翻訳においても、当初、中国語訳聖書の漢文訓読による翻訳も行われた。しかし、訓読文は語法上からも構造的にも、本来の日本語の文章とは異なる。また、口語文では言文二途、多様な方言、男女身分職業による独自の語彙などがあり、文語体とは区別があった。

しかし、聖書は格調高く、簡潔でありながらも詩情あふれる文で綴られる文体にしなければならない。また老若男女、字の読めない者さえが暗記し、口ずさんで魂の糧とし続けていく必要がある。そのため、聖書の内容はあくまで厳格な正確さで訳し、文章表現の上では日本人の意見を良く聞いて、格調高い雅びやかな、こなれた文を、と志向した。そのため、カナばかりの文章は説得力に欠けるので「漢字まじり」を採用した。栄光(さかえ)、律法(おきて)、慣習(ならわし)、職務(つとめ)など、振り漢字を採用した。翻訳は、ヘボンを中心に、ブラウン、グリーンを中心に共同訳の翻訳を行ったが、「洗礼」か「バプテスマ」か。「洗礼」(中国語)→「バプテスマ」を採用。この時、1875. 1. 11 決定に対し、ブラウンは不満で員会を脱退した。また、「耶蘇」は「ヤソ」か「イエス」かで、1876. 1. 4 会議では「ヤソ」、「イエス」のどちらでもよく、「イエス」と漢字にルビをふることに決定し、「耶蘇(イエス)」としたが、次第に「イエス」と訳すようになった。そして、1880年に新約聖書の和訳(明治元訳^{*13})が完成する。なお、現在の文語訳聖書は、1917年に改訳された新約聖書である。

一方、旧約聖書は1878年に「聖書常置委員会」(N. ブラウン、クインビー、カクラン、ヘボン、S.R. ブラウン、ライト、ワデル、ゴープル、クレッカー、マクレ、グリーン、パイパーの12名)が組織され、ヘボンを委員長として翻訳が行われた。これに日本人補佐役として、奥野昌綱、高橋五郎、松山高吉らが協力している。翻訳には、欽定訳英語聖書、ブリッジマン・カルバートソン漢訳聖書などが参考にされた。

〈旧約聖書分担表〉 1882-88年

ヘボン：出エジプト、レビ記、民数記、申命記、ヨブ記、箴言、伝道の書、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、ホセア、ヨエル、ゼパニヤ、アモス、オバデヤ、ミカ、ナホム、ハバクク、ヨエル、ゼパニヤ、ゼカリヤ

ヘボン、ファイソン：エズラ、ネヘミヤ、エステル

ヘボン、ファイソン、フルベッキ：列王下

パイパー：ヨナ、マラキ

ファイソン：歴代上下

ファイソン：ヨシュア、サムエル前後、列王上、士師記、ルツ記

ファイソン、ラムソン：創世記

ファイソン、植村正久：イザヤ

*13 「明治元訳 新約聖書 ①②」(エターナル・ライフ・ミニストリーズ)

フルベッキ、ウキリアムス、植村正久、松山高吉：詩編
フルベッキ、井深梶之助：雅歌、哀歌

旧約聖書の和訳は1888年に完成し、旧新訳聖書の翻訳作業が終了した（明治元訳＝文語訳）（1888）。

「こうして新旧約全書の翻訳事業は完成し、聖書は今や日本語で日本人の手にわたるようになりました。他国語のものと比べて見おとりしない立派な忠実な翻訳であるとわたしは信じています。あまり多く漢文がまじっていないで、国語を愛する日本人の学者たちから文学的作品として称賛されていることを知っています。容易に民衆に読まれ、理解されましょう」（1887年 ヘボン）。

3-1. ヘボンにおける教会形成

①日本基督公会の設立と公会主義

ここまでのことは、ヘボンを研究すれば記されていることであるが、ここからは、改革派・長老派教会に関係するヘボンの事績を確認して行くこととなる。ここでは2つのことを取り上げることとする。第一が長老教会の建設であり、第二が教理・信条文書の翻訳である。

日本における教会の設立は、「日本基督公会（横浜公会、現：日本キリスト横浜海岸教会）」が、1872年3月にバラを牧師に迎えて発足した。この時に、教派を無くした一つのキリスト教会を目指す公会主義に立ち、その後バラを中心に、「日本基督公会条例」（1874.4）を制定することとなる。公会条例の第二条例「公会の基礎」では、次のように記されている。

「我輩の公会は宗派に属せず。ただ主イエス・キリストの名に依て建る所なれば、単に聖書を標準とし、是を信じ、是を勉むる者は、皆是キリストの僕（しもべ）、我等の兄弟なれば、各中の各員全世界の信者を同視して一家の親愛を尽くすべし。是故にこの会を日本基督公会と称す。」

これは、無教派の路線「公会主義」を貫き、教派色の強い信条を排除して、簡易信条に立つことを謳っている。

*14 「公会の無教派主義の運動は1872年9月の第一回宣教師会議の決定によって推進された運動として評価できるが、宣教師会議における決議は真実な意味において一致していたのかという疑問が残る。議場において紛糾した点は、①各ミッションごとに教会を建設し、自らの責任で伝道するなかで協力しあう。②諸教派が協力して各地に合同教会を建設するの二点であった。S・R・ブラウンやバラたちは後者の立場をとり、ヘボンやルーミスらは前者の立場を取っていた。議場が紛糾したとき、ブラウンは次のような妥協案を出した。

「自今吾等の援助に由て設立せられるべき日本の諸教会に於ては、成るべく其の名称及び組織を同一ならしむべく努力せんことに同意す。即ち其名称は基督公会と言ふ合同的なものとなし、其組織は各教会の政治を其会員の協賛に由り教師及び長老制に由りて執行せらるべきものとす。右決議す」（山本秀煌『日本基督教会史』40頁）。

つまりヘボンらは当初から「無教派主義」に疑義を持っていた。横浜公会は緩やかな長老主義を採用していたとあって良いが、京浜（長老主義）と阪神（組合主義）の対立が表面化し、組合教会が独自の道を歩み始めると同時に、公会主義における問題点、世に対する妥協と信仰の曖昧さが問題となっていた。

②横浜第一長老公会の設立*15

そうした中、米国長老教会は、ヘボンと共に、1874年9月にヘンリー・ルーミスを仮牧師として迎え、横浜第一長老公会（横浜住吉町教会、現：日本基督教団横浜指路教会）を設立するに至る。これは、米国長老教会として厳格な長老主義の教会を建て上げることを

*14 「横浜指路教会百二十五年史」（日本基督教団 横浜指路教会、2004） p 34

*15 参照：前掲載「横浜指路教会百二十五年史」

意味していた。これが日本における長老教会の最初である。その後、カロザーズにより東京第一長老公会(1874.10、教会は分裂し、現在の日本基督教団芝教会、同巣鴨教会)、さらに法典長老教会(船橋市、1875.12)、品川長老教会(1877.6)、大森長老教会(千葉市、1877.7)が建設され、横浜住吉町教会と共に、日本基督長老会となり、アメリカ長老教会中国大会に属する日本中会となる。

後述するが、ヘボンはこの頃、聖書翻訳と並行して、三要素、初歩教理「さいはひのおとづれわらべてびきのとひこたへ」を翻訳し、「十字架ものがたり」、ウェストミンスター小教理、同信仰告白の翻訳を行っていた。

この公会主義と教派(長老)主義のどちらを歩むのかという路線問題は、現在に至るまで議論されている問題である。

③日本基督一致教会の設立

そして、1877年、長老教会を目指す教会を中心にして、日本基督一致教会が設立される(公会4(横浜海岸、東京新栄橋、信州上田、肥前長崎)、長老教会5(住吉町(指路)、東京露月町(芝)、下総法典、東京品川、千葉大森))。この時、信仰告白として、ウェストミンスター小教理、同信仰告白、ハイデルベルク教理問答、ドルトレヒト信仰告白(参照:「復刻・日本基督一致教会信仰ノ箇条」)を採用した。この時のことをブラウンは、下記のとおり記している。

「信条は一つの教派から、教理問答はもう一つの教派から、教会規則は第三の教派から採用されて、全部の者が何等かの方法で、日本人の教会の健全な教理と善良な秩序を維持するに必要なものを提供して協力するように努めたのです」(『S. R. ブラウン書簡集』p344)

- (1) 1877年10月成立(1中会)
教会9、会員総数623、教師志願者25、代議員8、宣教師12、東京一致神学校
- (2) 1881年、全国を3中会に分割(25教会、1642名)
北部中会(日本橋以北)、東部中会(日本橋～横浜)、西部中会(中国、九州)
- (3) 1885年、5中会
宮城中会、第一東京中会、第二東京中会、浪速中会、鎮西中会
- (4) 1890年、5中会、73教会、38伝道所、会員11,253名

④日本基督教会の設立へ

しかし、多くの日本人牧師にとっては、詳細信条が受け入れられず、宣教師によって押しつけられた感があった。それは、下記の言葉によって確認することが出来る。

山本秀煌「宣教師主人となりて之れが一切の献立をなし、日本人は客人となりてその饗応にあづかりしが如く、その西洋式料理の教義や規則を丸呑にして消化し兼ねたる観ある極めて不自然のものなりき」(『日本基督教会史』、p71)。

植村正久:「明治10年日本基督一致教会なるものを組織した場合には外国宣教師らに余儀なくせられて余り丁寧にもウェストミンスター信仰告白、基督教略問答、ハイデルベルグ問答、ドルト教憲の四つを採用して殆ど首も回らぬ時宜であった。明治23年日本キリスト者の実力ようやく発達してこの四筋の鎖を打ち切り、今のごとき簡明なる信条を自由に制定することを得たのである」(『植村全集』第四巻、p464)。

こうした状況の中、公会主義路線が改めて模索され、日本基督一致教会は日本組合基督教会との合同が話し合われるようになるが、それが失敗に終わる(1890年4月)。その後、日本基督一致教会は、信条と組織の再構成を行うことによって日本基督公会設立当時の精神を取り戻そうとした。そのため同年12月に行われた大会では、信条・憲法・規則を改正し、同時に組織の名称を日本基督教会(旧日基)とした。大会では信条問題が取り上げられ、二十四箇条からなる原案が提出され審議に入るが、議員から異論が出、簡易信条が支持されて使徒信条をもって信仰告白とすることで分かりやすい信条にすることが今の時代に大切であるとの意見が支持された。その結果、委員長のインブリーは、信条を再提出するに至り、最終的に、簡潔な前文を附した使徒信条を採用することが決議された^{*16}。

この日本基督教会の設立に関して、横浜指路教会では「日本基督教会の創立と信仰告白

*16 前掲載「横浜指路教会百二十五年史」p139-141

の作成によって日本基督教会がミッションから徐々に自立して行ったことだけは確かなことである。……この日本基督教会の発足は、全国の長老制度の教会を志向する教会に大きな励ましを与えることになり、盛んなる伝道が行われることになった^{*17}と語る。

また、日本キリスト教会50年史では、日本基督教会の設立に関して、下記のとおり総括している^{*18}。「『一致教会の歴史をいわば否定的でありながら、これを跳躍台として克服しようとしたところにうまれた』（土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』日本基督教団出版局、1975年、60頁）ということがこの場合ふさわしいと言える。

一方、旧日基において、簡易信条を採用したことにより、戦争に対して、また偶像に対して戦うことができず、戦争に協力し、植民地における邦人教会設立に力を貸し、教会の代表が神社参拝を行い、礼拝において宮城遙拝をおこなった事実を忘れてはならない。

3-2. ヘボンにおける信条文書翻訳

通常のヘボン研究では行われない分野であり、最後に挙げるのが、信条文書の翻訳である。

ヘボンは、聖書翻訳の傍ら、信条文書の翻訳や基本文書の執筆にも携わっていた。ウェストミンスター小教理問答、信仰告白の作成に関しては、別紙としてお配りしている『復刻・日本基督一致教会 信仰ノ箇条』にある「はじめに」と「解題」を紹介することとする。

「はじめに ヘボン宣教師との出会い」 吉岡 繁
「解題 『ウェストミンスター信仰箇条 全』（1880年版）」 石丸 新・安田直人
「解題 『耶蘇教畧問答 全』（1876年版）、『耶蘇教略問答 全』（1879年改定版）」
山口陽一

ヘボンが聖書の翻訳と共に、信条文書の翻訳を行ったことは、日本語における神学用語の確立においても、非常に大きな功績を残したと言える。この功績を私たちは忘れてはならない。

ヘボンの主な翻訳、著書は、下記のとおりである。

- ・「三要文」刊(1872)奥野昌綱と共に。 使徒信条、十戒、主の祈り
- ・「さいはひおとづれわらべてびきのとひこたへ」(1873)奥野昌綱と共に。
→「キリスト教初歩教理問答書」(つのぶえ社、1954初版)
- ・「十字架物語」刊(1874)。
- ・「耶蘇教略問答^{*19}」刊(1876)。 →「ウェストミンスター小教理問答」
- ・「ウェストミンスター信仰箇条^{*20}」刊(1880)。 →「ウェストミンスター信仰告白」
- ・「聖書辞典^{*21}」刊(1892)山本秀煌と共に。

3-結.

本研究は、日本における改革派・長老派教会に属する私たちが、改革派信仰に基づく教会形成を行うにあたって、宣教師J.C.ヘボンの功績を礎にして建設していることを確認してきた。すでに評価が確立している医療、聖書翻訳、辞書編纂、大学設立の分野と共に、ウェストミンスター信条に基づく長老教会を設立したこと、ウェストミンスター信仰告白・小教理問答を翻訳し、聖書・神学用語を確定したことを、私たちは正しく評価しなければならぬ。

*17 前掲載「横浜指路教会百二十五年史」p141

*18 「日本キリスト教会50年史」(日本キリスト教会歴史編纂委員会、2011)、p48

*19 「復刻・日本基督一致教会 信仰ノ箇条」

*20 前掲載「復刻・日本基督一致教会 信仰ノ箇条」

*21 「聖書辞典」(J.C.ヘボン、山本秀煌編、エターナル・ライフ・ミニストリーズ)

覆刻・日本基督一致教会 信仰ノ箇条 教文館 (2013)

はじめに ヘボン宣教師との出会い

吉岡 繁

この度、日本基督一致教会が明治初期に採択した『信仰ノ箇条』を覆刻出版できますことは、日本のキリスト教会のみならず日本人の伝統的な宗教思想全体の理解にとって大きな貢献であると考えます。この改革長老教会の信条の翻訳事業の中心となって働いたヘボンとの出会いについて振り返ってみたいと思います。

私は、横浜で生まれ育ちましたので、宣教師で医師、日本語に熟達し、聖書を日本語に訳したり、和英辞書を著したり、ヘボン式ローマ字を造った人として、ヘボンの名前は比較的早く子供の頃から知らされていきました。しかし、ヘボン訳『ウエストミンスター信仰箇条 全』を初めて手にしたのは、1999年、アメリカ正統長老教会 (OPC) 外国伝道委員会幹事マルコ・ビューブ長老が、ウエストミンスター神学校の図書館所蔵の本書のコピーを送ってくださった時です。これには脱落がありましたので、同教会のスチュアート・ラウワ宣教師を通してトマス・ヘイスティングス博士 (元アメリカ合衆国長老教会日本宣教師、元東京神学大学教授) にお願ひして、プリンストン神学校図書館のウォーフィールド文庫にある原本から補填することができました。これは日本基督一致教会時代のアメリカ長老教会のW・インブリー宣教師 (明治学院教授) が、日本の教会の状況を添え書きして『ドルト大會ニ於テ承諾セラレタル教典 全』 (フルベッキ・奥野昌綱訳) と共にアメリカの恩師B・B・ウォーフィールドに送ったものです。

日本基督一致教会は1877 (明治10) 年に創立されましたが、中会において改革長老教会の中心的信条である『ウエストミンスター信仰箇条 全』の日本語訳をヘボンに託しました。シンガポール^{ママ}伝道の経験があるヘボンは、アメリカ長老教会から新しい伝道地として開かれる日本への最初の宣教師・医師 (プリンストン大学、ペンシルベニア大学出身) として任命され、1859 (安政6) 年10月に神奈川に着きました。彼の日本赴任の航海中の手紙を読んで驚くのは、ヘボンが船中日本語で『ヨハネ福音書』を読み、日本語の文法を学んでいたということです。これは中国への宣教師ギョツラフが、遭難した日本人から得た日本語の知識で作ったものをヘボンが入手していたものと思われます。ヘボンの語学能力は抜群で、後に著される『和英語林集成』は日本で最初の本格的な和英辞典です。彼はこの能力を用いて聖書全体の日本語訳に貢献しました。聖書と日本語に熟知しているヘボンに『ウエストミンスター信仰箇条 全』の翻訳を教会が託したことは、オランダ出身のフルベッキに『ドルト大會ニ於テ承認セラレタル教典 全』の翻訳を依頼したことと共に、教会の良識を示していると言えます。

ママ 中国 (アモイ) が正しい

日本の改革長老教会では、信条を「よく学べ」と声高に言われながら、多くの教会・牧師・長老・信徒がこの優れた諸信条を「床の間の置物」のようにしているのではないのでしょうか。信条はキリストにある「神の無償の愛」に対する教会の感謝の応答ですから、聖書と照らし合わせて信仰の理性をもって正しく学び、それを生活において実践するとき、キリストによる神の救いの御業は進展するのです。

キリスト教会の長い歴史の中で、聖書を誤って解釈する異端的教えが現れて教会を混乱させたことが度々ありましたが、教会はその度に正統的信条を継承して教会の正しい伝統を継承してきました。全キリスト教会が共有する使徒信条、ニカイア信条、アタナシオス信条、カルケドン信条の四つの基本的・普遍的信条はこのようにして告白されたものです。そしてアウグスティヌス、ルター、カルヴァンを経て告白された三十数個の諸信条は、最も正統的なキリスト教教理の表明であると、改革長老教会が信じるものです。

日本基督一致教会が採択した『信仰ノ簡条』の、明治初期の日本語にチャレンジして、先人の真摯な信仰に学ぶことは、大いに意義あることと思います。

キリスト信徒が神の存在と義と愛についての教理と経験を深めれば深めるほど、その度合いに応じて神への信頼は高められ深められて、その人生は豊かにされます。

本書の出版が祝福され用いられるよう祈ります。

解題 『ウエストミンスター信仰簡条 全』（1880年版）

石丸 新・安田直人

日本基督一致教会に加わった、アメリカ長老教会、スコットランド一致教会は、信仰告白として、ウエストミンスター信仰告白と同大小教理問答を採用していた。そのうちのウエストミンスター信仰告白の最初の日本語訳が、『ウエストミンスター信仰簡条 全』（以下、ウ信仰簡条と略）である。

1869年に「旧派」と「新派」が合同したアメリカ長老教会は、1870年に独自の海外伝道局を組織した。海外に設けられた大会には、インドと中国があり、日本中会は中国大会に所属した^{*1}。長老教会がその運営のために用いた教会憲法が、このウ信仰簡条の底本であろう^{*2}。

1879年10月に開催された日本基督一致教会の第5回中会で、ウ信仰簡条の翻訳委員として選挙によって選ばれたのは、アメリカ長老教会の宣教医師ヘボン（中会記録ではヘボン長老）ただ一人であった。

ヘボンは1879年までに、既に以下の執筆・翻訳・出版を行っている。基礎作業として『和英語林集成』（第一版1867年、第二版1872年）、聖書翻訳としてブラウンと共に『新約聖書馬可伝』『新約聖書約翰伝』（1872年）、伝道用文書として『真理易知る^{*3}』『十字架のものがたり』など、教理文書として『三要文^{*4}』『さいはひのおとづれわらべてびきのとひこたへ^{*5}』『耶蘇教略問答 全^{*6}』（1876年、改訂1879年）である。

それ故、多忙の中で、1880年4月の第六回中会で、ヘボンはこう報告している。「右

*1 Presbyterian Church in the U. S. A., Minutes of the General Assembly, 1873, p. 684. 日本中会に属する議員として、C. カロザース、D. タムソン、D. ルーミス、E. R. ミラーの名前がある。

*2 The Constitution of the Presbyterian Church in the United States of America. 確認したのは1841年版。内容は Confession of Faith, The Larger Catechism, The Shorter Catechism, The Form of Govenment, The Book of Discipline, The Directory for the Worship of God である。岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、2009年、297、308頁も参照。

*3 D. B. マッカーティによる漢文著作の和訳。海老沢有道『日本の聖書－聖書和訳の歴史』日本キリスト教団出版部、1964年、125頁。

*4 十戒、主禱文、使徒信経の最初の翻訳。ヘボンと奥野昌綱による。『植村正久と其の時代』第4巻、教文館、1938年、59-62頁。

*5 Joseph P. Engles, Catechism for young children, being an introduction to the Shorter Catechism., 1840. を奥野昌綱と共に翻訳したもの（1972-73年）。後に『初學問答』、戦後には『基督教初歩教理問答書』として日本の教会で長く用いられる。

*6 参照、山口陽一「法典長老教会と『ウエストミンスター小教理問答』最初の日本語訳」『基督神学』第23号、2011年。

ノ翻訳ハ略稿ヲ脱セリ然シ今一回校讎ヲ加ヘタシ故ニ此レ等モ来会迄延期アランコトヲ乞」。この時点で略稿を脱していたヘボンは、翌1880年10月に聞かれた第七回中会では、こう報告するのである。「我等委員トシテウエストミニストル條例ヲ譯シ畢レリ即チ基本ヲ中会ニ進呈ス」。これは、1881年4月に聞かれた第八回中会で受け入れられた。

ウ信仰箇条翻訳の特筆すべき特徴は、他の三文書の翻訳と比較しても、上述のような日本語の実力を持ったヘボンによる翻訳であったので、日本における教理用語の確定について、極めて大きな影響を及ぼしたという点にある。

実例を挙げてみよう。いずれも「耶訴教畧問答 全』(1876年版)、『耶蘇教畧問答 全』(1879年改訂版)、「ウエストミニステル信仰箇条 (1880年版) の順である。

	『耶蘇教畧問答 全』 (1876年版)	『耶蘇教畧問答 全』 (1879年改訂版)	『ウエストミニステル信仰箇条 全』 (1880年版)
Providence	よろづの物を守りをさめたまふ	同	摂理
Covenant of grace	恩 (めぐみ) の約 (ちかひ)	同	恩ノ契約
the Sacraments	聖禮	同	聖禮典
Of Christ the Mediator	—	—	キリストノ中保ノ事

摂理、恵みの契約、聖礼典、仲保者キリスト。これらは改革長老教会のみならず、広くプロテスタント教会の中心教理用語である。確定した教理用語なしに、聖書を解釈して神学を営むことはできず、また健全な教会形成も有り得ない。

そのことを考えると、改めて日本における教理用語の確定に果たしたヘボンの役割への再評価、また日本基督一致教会の四つの「信仰ノ箇条」採択が後の教会に及ぼした大きな影響への再評価が、今後の課題として浮かび上がってくる。

解題 『耶蘇教畧問答 全』(1876年版)
『耶蘇教略問答 全』(1879年改定版)

山口 陽一

(1) 『耶蘇教畧問答 全』(1876年版)

内題には「いえすけうりやくもんどう」とるびが振られている。上智大学キリシタン文庫所蔵『耶蘇教畧問答』(KBs 1854)の覆刻である。本版の微妙な特徴も一致する同一版が旧法典長老教会の長老安川一(はじめ)(現在は安川厚)家に二冊収蔵されている。上智大学本は題籤(だいせん)が失われており、そこに「耶蘇教略問答」と墨書してある。この際、「畧」が「略」に変わり、「全」の一字が欠落したと思われる。そこで「耶蘇教畧問答 全」の題籤が残っている安川家本の表紙^{*1}も収録し、書名も「耶蘇教畧問答 全」とした。

翻訳作業は、1873年12月のアメリカ長老教会の日本中会設立、翌74年4月の第一回中会(長老会)を背景に始まる^{*2}。1875年4月6日の第3回長老会は、翻訳委員にカロザース、ヘボン、高橋(安川)亨の三人を選出し、これにO.M.グリーンと戸田忠厚が加わる。ヘボンは同年4月7日付書簡において、すでに小教理を訳していると記している^{*3}。しかし、1876年1月4日の長在会で「耶蘇」を「イエス」と読むことが決定されると、カロザースはミッションを離脱し、戸田忠厚と高橋亨も行動を共にした。

1876年2月11日の書簡において、ヘボンは翻訳の完成が近いと報じる。「『小教理問答』は今版木師の手許で作っているから、数日のうちにできあがるでしょうから、写しを送ります。自分で申すのは何ですが、立派に翻訳されていると思います^{*4}。そして出来上がった『小教理問答』を3月9日の書簡と共に発送する。「『小教理問答』の写しを一部お送りいたします。上手に訳されており見事な出来栄えであるとわれながら得意になっております^{*5}」。

上智大学と安川家の木版「耶蘇教畧問答 全」がこれであると推定される。出版は、1876(明治9)年2~3月である。なお、『上田文庫目録』には「耶蘇教略問答 和本三十一枚 木版刷 米国遺伝教使事務局 明治六年頃」の記述があるが、これが版本で存在した可能性は低い。ちなみに、上田文庫は1945年の大阪空襲で焼失したと考えられている^{*6}。

*1 資料896頁参照。

*2 池田多実男「日本プロテスタント宣教初期における「ウェストミンスター小教理問答」邦訳の意義—邦訳『耶蘇教畧問答』刊行と神学思想的背景を中心に—」『神学』68号、2006年、155頁。

*3 岡部一興編、高谷道男・有地美子訳『ヘボン在日書簡全集』教文館、2009年、308頁。

*4 同上書、314頁。

*5 同上書、315頁。

*6 西阪保治「日本文書伝道の発祥」『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、1984年、11頁。石丸新『改革派カテキズム日本語研究』新教出版社、1996年、159頁。

(2) 『耶蘇教略問答 全』(1879年、内題は「耶蘇教畧問答 全」)

木版の『耶蘇教畧問答全』を活版にした改訂版が『耶蘇教略問答 全』である。安田直人氏の所蔵本を覆刻した^{*1}。これには僅かに違う前刷があるが^{*2}、覆刻した版は正誤表の「(仁(め)惠) ハ (仁惠 (めぐみ)) ノ誤」に従って本文を「仁惠」に直し、正誤表にも数か所の訂正を加えた後刷と思われる。

1877年10月3日に日本基督一致教会が設立されたとき、四つの「信仰ノ箇条」の中で翻訳出版が確認されているのは『耶蘇教畧問答 全』のみである。S.W. カロザースは、ウェストミンスター小教理問答の研究において、小教理はヘボンによって1877年10月までに翻訳と出版がなされ、ヘボンは数年後にそれを改訂したと伝えている^{*3}。そして、プリンストン神学校所蔵の『耶蘇教略問答 全』の表紙には、“Revised by Dr. Hepburn 1879”の書き込みがあることを安田直人が紹介している^{*4}。

つまり、1876年2～3月に木版で出版された『耶蘇教畧問答 全』は、1879年に活版で改訂されたが、11か所に誤植があり「正誤表」が付された。その時、わずかに違う二つの版が出版された。

次に訳語についてであるが、ウェストミンスター小教理問答の中国語訳『耶蘇教要理問答』(1866年)とヘボンの『耶蘇教畧問答 全』(1876年)を比較すると、以下のような借用がある。たとえば第12問「長生(いける)之約(ちかひ)」→「長生の約」、第16問「常情」→「常情(よのつね)」などである。しかし、日本語の訳語はかなり独自であることを第1問の比較から示す。

*1 プリンストン神学校、青山学院間島文庫、上智大学 (KBs185.5' 改装・正誤表欠)、安川家(灰色表紙)の蔵書が同版である。

*2 上智大学 (KB s 185.6)、東京神学大学(表紙に「明治十年」の鉛筆書きあり)、安川家(灰色表紙)の蔵書が同版である。

*3 “Warfield however says (on the authority of the Rev. Dr. William Imbrie of Tokyo) it had been translated and printed by October 1877. This translation had been made by Dr. J. C. Hepburn who revised it a few years later.”, S. W. Carruthers, Three Centuries of The Westminster Shorter Catechism,, 1957, University of New Brunswick, p.93.

*4 安田直人「日本基督一致教会の信仰告白について—その翻訳出版、実際の使用を巡って—」『改革派神学』第26号、1999年、73頁。また資料898頁参照。

『耶蘇教要理問答』(1866年)

何為人之本 (人の本と為すは何か)

人之本乃歸榮神悦樂神迄於永遠也 (人の本は神に榮を掃し永遠迄神を悦樂する也)

『耶蘇教畧問答 全』(1876年)

ひと もつば めあて なに
人の 専ら目的とすべきことは何ぞや

ひと もつば めあて またかぎりなくかみ たのし
人の 最ら目的とすべきことは神のさかえをあらハし又永 遠神を 樂むことなり

『耶蘇教略問答 全』(1879年)

ひと めあて なに
人のおもに目的とすべきことは何ぞや

ひと めあて かみ たのし
人のおもに目的とすべきことは神のきかえをあらハしかぎりなく神を 樂むことなり

他にも独自の用語が数多くある。第4問「其智、其仁」→「智慧(さとき)、善(よき)」、第7問「為神之旨」→「神の定」、第13問「始祖」→「首祖(もとつおや)」、第21問「無始之神子」→「神の始なく終なき子」、第45問「我之前」→「わが面(かほ)の前」、60問「仁慈」→「矜恤(あはれみ)」、95問「聖会」→「教会」などである。このように『耶蘇教畧問答 全』は、漢訳の借用ではなく独自の日本語を用いている。

ウェストミンスター信仰告白 翻訳変異表

章	英語本文	ヘボン訳	松谷訳（三訂版）
第1章	Of the Holy Scripture	聖書ノ事	聖書について
第2章	Of God, and of the Holy Trinity	神即チ父ト子ト聖霊ノ事	神について、また、聖三位一体について
第3章	Of God's Eternal Decree	元始(ヨノハジメ)ノ前ヨリ神の定め玉ヒシ事	神の永遠の聖定について
第4章	Of Creation	万物ヲ創造(ツクリ)玉ヒシ事	創造について
第5章	Of Providence	萬物ヲ摂理シ玉フ事	摂理について
第6章	Of the Fall of Man, of Sin, and the Punishment thereof	罪愆(ツミ)ノ事	人間の墮落について、罪について、また、その罰について
第7章	Of God's Covenant with Man	神ノ人ニ契約シ玉ヒシ事	人間との神の契約について
第8章	Of Christ the Mediator	キリストノ中保ノ事	仲介者キリストについて
第9章	Of Free Will	人ノ心ノ自由ナル事	自由意思について
第10章	Of Effectual Calling	神ノ招ニ従ハシムル事	有効召命について
第11章	Of Justification	義トセラル、事	義認について
第12章	Of Adoption	子トセラル、事	養子とすることについて
第13章	Of Sanctification	聖クセラル、事	聖化について
第14章	Of Saving Faith	救ハルベキ信仰ノ事	救いに導く信仰について
第15章	Of Repentance unto Life	生命(イノチ)ヲ得ベキ悔改ノ事	命にいたる悔い改めについて
第16章	Of Good Works	善行(ヨキオコナヒ)ノ事	善い行いについて
第17章	Of the Perseverance Of the Saints	聖徒ハ終ニ至ルマデ恩ヨリ落ザル事	聖徒の堅忍について
第18章	Of Assurance Of Grace and Salvation	恩ニ預ルコトト救ヲ受ルコトヲ疑ハズシテ信ズル事	恵みと救いの確信について
第19章	Of the Law Of God	神ノ律法ノ事	神の律法について
第20章	Of Christian Liberty, and Liberty Of Conscience	「キリステアン」ノ自由及ビ良心ノ自由ナル事	キリスト者の自由と、良心の自由について
第21章	Of Religious Worship, and the Sabbath Day	神ヲ礼拝スル事及ビ安息日ノ事	宗教的礼拝と安息日について
第22章	Of Lawful Oaths and Vows	義キ誓及ビ願ノ事	合法的宣誓と請願について
第23章	Of the Civil Magistrate	官吏ノ事	この世の為政者について
第24章	Of Marriage and Divorce.	婚姻及ビ離縁ノ事	結婚と離婚について
第25章	Of the Church	教会ノ事	教会について
第26章	Of the Communion of Saint	聖徒ノ交際ノ事	聖徒の交わりについて
第27章	Of the Sacraments	聖礼典ノ事	聖礼典について
第28章	Of Baptism	洗礼ノ事	洗礼について
第29章	Of the Lord's Supper	主ノ晩餐ノ事	主の晩餐について
第30章	Of Church Censures	教会ノ責罰(イマシム)ベキ事	教会の譴責（けんせき）について
第31章	Of Synods and Councils	大会ノ事	シノッドとカウンシルについて
第32章	Of the State of Man after Death,	人ノ死後ノ情況(アリサマ)及ビ復活(ヨミガヘリ)ノ事	死後の人間の状態について、また、死者の復活について
第33章	Of the Last Judgment	末日ノ審判ノ事	最後の審判について